

背景の巨松きよ しよう ～〈式台〉式台の間～

後水尾天皇(1596～1680)が徳川幕府の招きに応じ、寛永3年(1626)9月6日から5日間にわたって二条城を訪れた「寛永行幸」は、二条城がもっとも華やいだ歴史的なイベントでした。本年度は、行幸から400年を記念し、行幸時に使用された二の丸御殿の部屋の障壁画を展示します。行幸の行事は、二の丸庭園の南側に設けられた行幸御殿を中心に行われましたが、二の丸御殿も、行幸に出仕した公家や門跡らの饗応の場として、また、大広間の南に設置された舞台上で上演された能の観覧席として使用されました。今回は、能観覧の末席となったとされる〈式台〉から、式台の間の障壁画を展示します。

二の丸御殿の大改築と〈式台〉

徳川秀忠(1579～1632)の五女である徳川和子(1607～78)が、後水尾天皇に入内したのは、元和6年(1620)のことでした。二条城には、和子のための御殿が設けられ、入内の行列は、二条城の東大手門を出発し、御所へ入ったのです。それから6年の間に、和子は二人の姫宮を生み、さらに三人目を懐妊していました。

大御所となっていた秀忠は、天皇と、自身の娘でもある中宮和子、そして天皇の母の女院を迎えるために、二条城の増改築を命じ、その工事は寛永元年(1624)に着手されました。城域を西に拡大して、本丸を築き、本丸に御殿や天守を建て、二の丸庭園の南から西にかけて、天皇一行のために、行幸御殿をはじめとする御殿群を設けました。二の丸庭園の東側から北側にかけては、家康時代に築造された御殿がありました。これを大規模に改築したものが、現在まで伝わる二の丸御殿です。

この改築工事に使用した材木を記した史料「材木高払帳」に「殿上之間(〈式台〉)のこと、後段で説明)仕直し(または作直し)」といった文言が記されていることから、〈式台〉は、この改築の際に、二の丸御殿の玄関を擁する〈遠侍〉と、最も公的な対面所である〈大広間〉を繋ぐ棟として、元からあった建物を大幅に作り直して現在の位置に繋いだと考えられています。実際、式台の間の裏側にあたる老中三の間には、新築であればあり得ない極端に幅の狭い壁や柱の配置などが見られます。

当然のことながら、〈式台〉を含む、二の丸御殿の障壁画も、この改築工事において新たに描かれたのです。

「殿上之間」と呼ばれた〈式台〉、観覧席となる

先に述べた「材木高払帳」や、以心(金地院)崇伝(1569～1633)が記した『寛永行幸記』(以下、『行幸記』と記す)に「殿上之間」と出てくるのが、今日〈式台〉と呼ばれる棟です。通常、徳川幕府の城の「殿上之間」は、〈遠侍〉の北側にある東西に二室並ぶ対面所を指します。二条城二の丸御殿では、今日「勅使の間」と呼ばれる二室で

す。なぜ、この時、現在の〈式台〉が「殿上之間」と呼ばれていたのか不明ですが、『行幸記』は、その現在の「勅使の間」についても、「殿上之間」と記しており、大変紛らわしいことになっています。

『行幸記』によれば、行幸四日目の能の上演の際に、〈式台〉＝「殿上之間」の縁は、「諸司、宮司、院司、北面、諸太夫、坊官等之座」として用いられました。これらの人々は、天皇及び行幸に随伴した天皇の家族、公家、門跡に仕えた下位の公家である事務官や武官といった人々と解釈できます。能の観覧席としては、末席にあたり、舞台は側面からしか見えません。しかし、舞台の東側にあった橋掛かりは比較的よく見えたことでしょう。

背景の巨大な松

観覧席となった縁の後方には式台の間があります。東西に長いその部屋の北側の壁には、二本の巨大な松が描かれています。巨大な松は、〈大広間〉の各室に展開していますが、この式台の間の松は、この先に最も公的な対面所空間である〈大広間〉一の間から三の間があることを予告し、あるいはまた、この式台の間が〈大広間〉を補完する部屋であることを示すかのように描かれているのです。

〈大広間〉の松も、式台の間の松も、画面最下部から根を表すことなく立ち上がり、長押を超えて枝を伸ばしています。また松の背景は、ほぼ一面の金地です。しかし、式台の間では、向かって左の松の、左上方に、雲の切れ間から遠山が、かなりの存在感をもって描かれ、向かって左端の壁には、大きく水辺が描かれています。この水辺は、元来は腰障子に続きが描かれていたと、史料から読み取れますが、現状の腰障子貼付絵は史料に記述されている画題とは一致せず、かつ紙の継ぎ目が複雑であることから、転用された障壁画であることが明らかです。元の障壁画については、現在のところ詳細不明です。

転用障壁画以外の、式台の間障壁画の筆者について、後世の史料等から、狩野探幽(1602～74)であると伝承されてきました。探幽が二の丸御殿のもっとも公的な部屋である〈大広間〉一の間から三の間を担当したというのは、ほぼ定説となっています。しかし、式台の間の松が、曲線を描きながらも上方向に伸びあがるのに対し、〈大広間〉一の間から三の間の松は、傾斜しつつ横方向に屈曲しながら伸びています。また、式台の間では、遠山や水辺を配されることによって、余白が目立たないのに対し、〈大広間〉一の間から三の間では、松の周りに大きな余白が設けられています。このように両者の特徴が大きく異なることから、式台の間の筆者は、探幽ではないと考えられます。近年は、狩野山楽(1559～1635)を筆者とする説が、有力になってきています。

松本直子(元離宮二条城事務所学芸員)